

北海道の魅力、道東を中心に

押味和夫

元・順天堂大学医学部血液内科教授

● はじめに

スギ花粉症がない道東に住んで13年になります。その前はアメリカのボストン郊外に住んでました。3年半いました。ボストンでは大西洋や近くの川、湖での釣りにはまってしまい(写真)、帰国したら東京には住めなくなっていました。自然が豊かで人口が少なく魚がいそうな所に住みたいと、北海道でも東の方、道東の鶴居村に住むことにしました。鶴居村は鶴(タンチョウ)がいる村です。釧路や鶴居の病院に非常勤で勤めてましたが、昨年7月になって患者さんの名前も薬の名前も覚えられないことに気づき、つまり呆けてしまったようで、80歳になったのを機に医者をやめました。時間に余裕が出来ましたので、この13年で経験した北海道、とくに道東の自然を中心に、皆さんにご紹介したいと思います。北海道はこれからが春ですので、まず春や夏の魅力をお伝えします。道東の冬は世界一美しいと信じてますが、これは最後にご紹介します。



ボストン沖でマグロを釣る

- 釧路から東の太平洋沿岸は魅力がいっぱい、ラッコが見られます
この地図の右端をご覧ください。



釧路市から東へ行った太平洋沿岸の浜中町の霧多布半島にはラッコがいます。11匹いるとの話です。霧多布半島に入って 1039 号線を、霧多布岬展望台の方向には行かずに右方向へ進みますと、終点が湯沸岬(とうぶつみさき)(別名、霧多布岬)の駐車場です。ここから湯沸岬の突端の灯台に向かって歩いてください。歩き始めてすぐ左側の崖下の海にラッコがいました。次の写真の赤い丸印の付近にラッコが浮いてました。私は目が悪いためよく見えませんでした。隣の海を覗いていた人が「おった、おった」と叫んだので、あわてて双眼鏡で確認して、「sea otter, sea otter」と応えました。Sea otter つまりラッコのことを言ったのですが…。デジカメではピントがぼけてうまく撮れませんでした。写真をご覧ください。

1週後にまた行きましたら、5～6匹のラッコを見つけました。同じ場所、近い場所だけでなく、岬の反対側(南側)にもいました。波がなく穏やで、岸に近い海を好むようです。浅い所だと海底の餌(貝、ウニ、エビなど)が容易に捕れるためでしょう。

岬の先端に立つ湯沸岬灯台は、日本ロマンチスト協会が実施した「恋する灯台プロジェクト」で、北海道第 1 号の「恋する灯台」に選ばれました。せっかく来たからには、恋する灯台もご覧になってください。

この霧多布半島の根元にある霧多布湿原や原生花園あやめヶ原では、初夏になりますとヒオウギアヤメやワタスゲ、エゾカンゾウなどが湿原一面に咲きます。ヒオウギアヤメとエゾカンゾウの群落の写真をご覧ください。

霧多布半島と原生花園あやめヶ原の間にある涙岬は、太平洋の荒波に向かって泣く乙女の横顔に見えますので、「乙女の涙」とも呼ばれています(写真)。ニシン漁が盛んだった昔、嵐の海にのまれた厚岸の若者に恋する乙女の泣く姿が岩になったと伝えられ、この名が付けられました。嵐の夜には、乙女のすすり泣きが聞こえてくるとか。左に見える立岩は、愛する彼女の悲しい叫びに向かって、一步一步、岸にたどり着こうとする若者の姿を思わせます(写真)。

次は細岡展望台です。前の地図だと分かりにくいので、次の地図をご覧ください。釧路市から摩周国道(391号線)を標茶町(しべちやちょう)方面に北上して、達古武(たっこぶ)湖に着

く前に左折します。しばらく行って踏切を渡りますと釧路川が見えてきて、すぐ右側に細岡カヌーポートがあります。カヌーの乗り場です。線路に沿ってさらに行きますと徐々に上り坂になり、もう一度踏切を渡りますと、やがて細岡ビジターズラウンジがあります。この右横をさらに上りますと、右側に細岡展望台へ入る歩道があります。ここを歩くとすぐ正面が細岡展望台です。ここからは広大な釧路湿原が一望できますし、釧路湿原のなかを蛇行しながら流れている釧路川が見えます(写真)。晴れた日には、遠くに雌阿寒岳や雄阿寒岳が見えます。展望台は釧路湿原の東側に位置してますので、夕日を望むこともできます。ここもお薦めの場所です。





ラッコ 2態



デジカムでは上手く撮れないなー



ヒオウギアヤメの群落





エゾカンゾウの群落



涙岬



立岩



釧路市から摩周国道(391号線)を
標茶町方面に北上して達古武湖に
着く手前に左折する

細岡展望台から見た釧路湿原
彼方に雌阿寒岳や雄阿寒岳が見えるのですが



● 六花の森、日高山脈、坂本直行さんの絵

北海道の中央部から南へ 2,000m 級の山々が連なる日高山脈。この山脈の東側、帯広市の南側に中札内村があり、ここに六花亭が経営する「六花の森」(次の地図の赤い矢印)があります。十勝六花をはじめ四季折々の山野草が咲く広大な庭園には、クロアチアの古民家を移築したギャラリーが点在してます。その近くには、同じ六花亭が経営する「六花亭アートヴィレッジ中札内美術村」があります。六花の森では5月に入りますとオオバナノエンレイソウの群落に花が咲き(写真)、この世のものとは思えない美しさです。六花亭アートヴィレッジ中札内美術

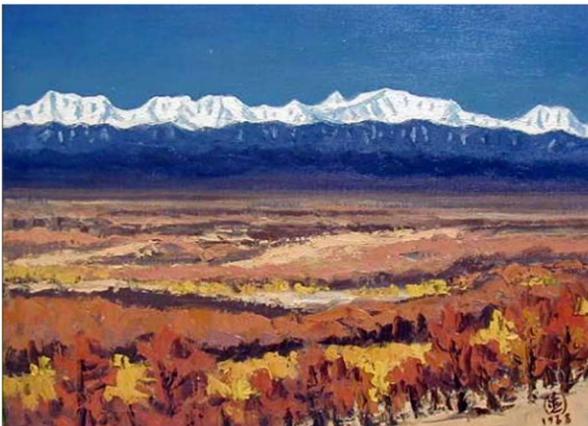
村には、広いカシワ(柏)の林のなかに、日本を代表する画家の相原求一郎、小泉淳作、真野正美、安西水丸らの美術館が点在しています。六花の森を訪ねるときも美術村を訪ねるときも、開館・休館の日程にご注意ください。

農民画家（あるいは山岳画家とも呼ばれる）坂本直行(ナオユキ)氏(1906～82)は、地元では親しみを込めてチョッコウさんと呼ばれています。チョッコウさんが描いた絵は、六花の森のなかの坂本直行記念館、直行デッサン館、直行絶筆館に展示してあります。日高山脈を描いた力強い絵は、多くの人を魅了し続けています(写真)。中札内村から東へ向かい大樹町に入る手前の左側に丸山展望台があります。チョッコウさんは、よくここから更別原野の向こうに見える日高山脈を描いていたそうです。広尾町に向かって235号線を南に走り、大樹町内を流れる歴舟川の橋を渡ってすぐの左上に案内板があり、ここに『山岳画家坂本直行翁入植の地、「555m先右折」』と書いてありますので(写真)、ここを左折して歴舟川沿いに行きますと336号線にぶつかります。付近にはまた同じような案内板があり、チョッコウさんの入植の地(地図の右下と写真)まで案内してくれます。この入植の地は、チョッコウさんが開拓農民になることを決意して、昭和11年に広尾の原野に入植した地です。ここから見た日高山脈の写真をご覧ください。





オオバナノエンレイソウは
北海道の春を代表する花。
北大の徽章にもなっています。



直行さんの絵、晩秋の日高山脈と柏の原野



直行さんの絵、厳冬の日高山脈



チョッコウさん入植の地から見た日高山脈



● カヌーで川を下ろう、湖を漕ごう

鶴居村に移住してすぐに、釧路の業者にカヌーを造ってもらいました。アメリカで漕いでいたカヌーが Lincoln 号でしたので、このカヌーは Lincoln II と命名しました。写真をご覧

ください。



日本で造ったカヌーは、
Lincoln II と名付けた。

釧路湿原ノロッコ号



よく行くのは塘路湖です。ここでカヌーを下ろして湖を周るか、釧路川に通じるアレキナイ川を下り釧路川へ入って下流の細岡カヌーポートまで行きます。アレキナイ川でカヌーから釣りをして、塘路湖へ引き返すこともあります。フナやウグイが釣れます。釧路川を下るときに、途中に釧網本線の鉄道が釧路川に近づく場所があり、ここで「釧路湿原ノロッコ号」と会えるように時間を見計らって下ります。釧路湿原ノロッコ号はここで止まって、乗客は釧路川を見下ろします(写真)。たまには細岡カヌーポートから岩保木(いわぼつき)水門まで下ることもあります。ここは釧路川と新釧路川の分岐点です。

釧路川や塘路湖を案内してくれるカヌー屋さんが多いです。英語で案内してくれる会社もあります。ツアー会社によっては、冬でも体験できるツアーを提供しています。コースは様々です。釧路川が屈斜路湖から流れ出る跳湖橋からもガイドします。このコースは川幅が狭く兩岸から木が倒れて流れをふさいだり、急な曲がりになっていたりするので、コースを熟知してないとチンします。浅瀬を下ってカヌーの底に穴をあけたことがありました。

もちろん十勝川などでもカヌーの宣伝をしています。でも釧路川以外のことは知りません、スミマセン。

● トーチカ

トーチカとはロシア語で「点・地点」の意味で、軍事的に重要な地点を守るためコンクリートなどを固めて造った小型の防衛用陣地のことです。太平洋沿岸の大樹・広尾・浦幌などにあるトーチカは、太平洋戦争末期の昭和19年(1944年)に、米軍の本土上陸に備えて造られたとのこと。円形や方形などの単純な外形で、全長が数メートルから十数メートル程度あり、銃

眼となる開口部を除いて壁でよく保護された防御施設です。壁には視察用と銃眼を兼ねた必要最小限の穴が開けられています。構造の大部分が地面より下になっているトーチカもあります。遺構として、北海道の根室市から苫小牧市にかけての太平洋岸に、複数のトーチカ群が残されています。釧路市内にもあります。硫黄島にもあるそうです。



大樹町の太平洋沿岸にあるトーチカ



大樹町の内陸部で見つかったトーチカ

壁には視察用と銃眼を兼ねた
必要最小限の穴が設けられている



● 北海道に残る会津藩士の墓

私は伊達藩出身ですが、若いころ石光真人編著の「ある明治人の記録、会津人柴五郎の遺

書」を読んで、心は会津藩士になってしまいました。

江戸時代末期の蝦夷地は、東北の諸藩により警護されていました。会津藩は樺太、利尻、宗谷、松前を警護していました。なぜこのような警護が必要だったのでしょうか。約200年前の江戸時代、鎖国下にあった日本に対しロシア側から通商を求める動きが強くなってきました。日本はロシアの要求を拒否したため、ロシアは武力行使の手段に出ました。その標的となったのがロシアに近い樺太や千島でした。こうした動きに対し、幕府は会津藩をはじめとする東北諸藩に、蝦夷地防備の出兵を命じたのです。会津藩からは、文化4年(1807年)から文化6年(1809年)にかけて、総勢 1,558 名の藩士が出陣しました。

利尻島は文化4年(1807年)にロシアの襲撃に遭い、商船が焼き払われたり島民が捕われたりしました。ペリー来航の50年前、いち早く外国の洗礼を受けた北辺における一連の事件で、まさに「北の黒船事件」とも呼ばれる出来事でした。利尻島には 250 名の会津藩士が派遣され警護に当たりました。山を越え、海を越え、出陣から4ヶ月の道のりを経てようやく島に到着したことが、当時の記録に残っているそうです。会津藩士が警護についたのは、ロシア人の来襲が終わった後でした。

文化5年、樺太警備を終えた会津藩士を乗せた7隻の船のうちの1隻、観勢丸(かんぜいまる)が帰路で暴風雨に遭い、利尻島のリヤコタン(現在の沓形～種富町の海岸域)に漂着し大破沈没するという事故が起こりました。利尻島には、この事故で命を落とした者と島で病に臥した者8名の藩士を吊った墓碑が3カ所に安置されています(写真)。また稚内の宗谷護国寺と焼尻島にもそれぞれ2基ずつ墓碑が残されています。派遣された藩士は水腫病にかかると死ぬことが多かったとのことで、これを問題視した幕府は、当時水腫病に効果があるとされたコーヒーを出兵隊に送ったといえます。

水腫病とは？ 水腫病にコーヒーが効く？ 話はそれますが、このことについて最近出版された弘前医療福祉大短大の方の興味深い論文がありますので、その要点を紹介させていただきます。江戸時代、日本に初めて伝わったコーヒーは、その当時、薬としても飲用されており、津軽をはじめとする東北の藩士が北方警備のため蝦夷地に派遣された際、病による陣没者の減少に大きく貢献したといわれている。蝦夷地での藩士たちを脅かしたのは寒さと浮腫病(水腫病)であった。この病は「腫レ出シ後心ヲ衝キ落命ニ至ル」といわれ、罹患した者の多くは死亡したという。現代でいえば脚気、または壊血病ではないかとされている。1803年に蘭学医・廣川獬が『蘭療法』の中でコーヒーには浮腫病に対する薬効があると説いているが、コーヒー抽出液には脚気、壊血病に有効な成分は含まれていない。一方、蝦夷地での藩士たちの生活は、厳しい寒さと多湿な環境に対して簡便すぎる住居と保温性の低い衣服や寝具、また偏った食生活のため栄養状態も悪く、藩士たちの多くが凍傷、低体温症を患っていたと推察される。これらの疾病は浮腫・むくみ・不整脈・心室細動といった症状を呈し、悪化すると致命率も高いなど浮腫病の症状と一致する。以上のことから、ここでいうコーヒーの薬効とは、コーヒーに含まれるカリウムの利尿作用、またナイアシンの血流改善効果などを指すと考えられ、浮腫病の予防、症状緩和という点において藩士たちの健康維持に有効であったと結論づけら

れた。

話は戻ります。野付半島の入り口近くにも、会津藩士の墓があります。野付半島に入るとき、私は必ずこの墓にお参りします。文久3年(1863年)に亡くなった会津藩士・稲村兼久とその孫、そして佐藤某の3名の墓とされています(写真)。ではなぜ野付半島に会津藩士の墓があるのでしょうか。

ナポレオン戦争のためロシアはヨーロッパに力点を置くようになり、ロシア船の蝦夷地への来航が減ったことで、文政4年(1821年)に幕府は蝦夷地を松前藩の管理に戻しました。しかしペリー来航後、幕府は安政2年(1855年)に蝦夷地を再び幕領とし、安政6年(1859年)には蝦夷地を分割して諸藩に与える分領政策へ方針を転換しました。東北の諸藩は蝦夷地の分与を受け、会津藩は標津、斜里、紋別を藩領とし、幕府箱館奉行が支配していた網走領地を含む地域の警備に当たりました。知床半島、野付半島も含まれてます。万延元年(1860年)の蝦夷地警備の地図をご覧ください。会津藩は中老田中玄純を蝦夷地若年寄に任じ、標津のホニコイに陣屋を建設しました。文久3年(1863年)の秋には、なんとか6棟の陣屋が整ったとのこと。このホニコイ陣屋では、代官以下200余名の会津藩士が北方警備を担当しました。野付半島にある会津藩士の墓も、このとき亡くなった藩士の墓と思います。



利尻島にある会津藩士の墓

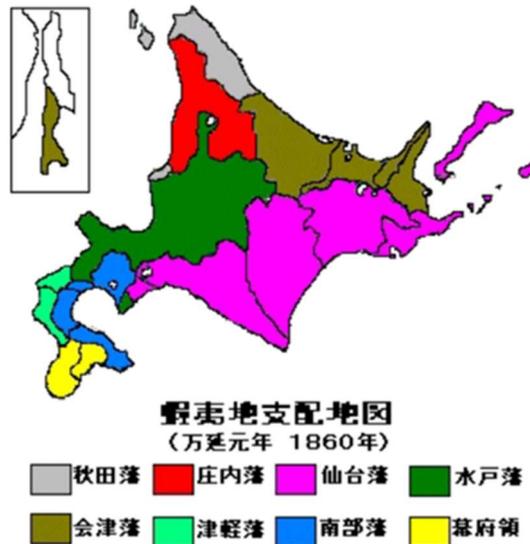
利尻島にある会津藩士顕彰碑と会津藩士の墓



野付半島にある会津藩士の墓



江戸時代末期の蝦夷地 警備



● 道東の釣り

釣りキチの私には、これが最重要テーマです。

1. 鶴居村の川

アメマスとヤマメ、ウグイ、たまにニジマスが釣れます。川幅は3~5m の浅い川です。ウエーダーがあると移動は容易ですが、長靴でもなんとかなります。寒い日がありますので厚め

の服装、帽子、雨具、熊除け用の笛と鈴をご用意ください。熊除けには、ラジオからの音や車のクラクションも効果があるでしょう。レンタカーは、川沿いのデコボコ道へ入りますので、車体が低いのはよくないです。釣竿はいくつか考えられます。フライは下流の広いところでは使えますが、上流に行きますと川幅が狭くなり上から枝が垂れ下がっていて難しい場所もあります。あまりお勧めできません。ルアーは、魚のサイズが10~20cmですので、あまり大きなルアーは不要です。たまにもっと大きいウグイやアメマスが釣れますが、私が好むのは餌釣りです。2.5~3mぐらいの長さまで伸びるフナ釣り用の安い竿です。下流の川幅が広い場所では、リール竿に錘と餌を付けて飛ばします。餌は水が澄んでいればブドウ虫、濁っていればブドウ虫でもミミズでもよく食います。イクラもいいです。熊が出る可能性は低いですが、熊は移動するときに牧場が目立つので、低い土地、つまり川沿いを移動することが多いようで、背丈よりも高いフキの中などに入り込むのは避けたほうがいいでしょう。ワイワイガヤガヤ音を立ててれば、逃げていくでしょう。でも魚も逃げるかもしれませんが。熊が出そうな上流には、オシロコマがいます。イクラで5~10cmのが釣れます。横腹に橙色の斑点がある美しい魚です。

2. 釧路川

鶴居村は釧路湿原の西側にあり、釧路川は釧路湿原の東側を流れています。ここでは5月ごろから型のいいアメマスがよく釣れるようです。岸からルアーで釣りますが、私は釣り方を知りません。

3. アレキナイ川

カヌーの章で書きましたが、塘路湖から釧路川へ抜ける途中のアレキナイ川では、ウグイやフナが釣れます。フナ釣り用の仕掛けで、餌釣りです。餌はミミズだったかな。カヌーでアクセスします。フナは大型の金色で実に美しいのですが、たまにしか釣れません。入れ食いのときもありましたが。なお塘路湖での釣りは有料ですので、塘路湖では釣らずにアレキナイ川に入ってから釣ってまた戻るのもいいです。

4. 屈斜路湖

北岸から西岸にかけて、ヒメマスが釣れます。ヒメマスは湖沼残留型のベニザケです(写真)。秋になりますと産卵のため岸に近づきますので、11月初めごろに岸からルアーで釣ります。ヒメマス用のルアーがありますので、釣具屋さんで聞いてください。ただし釣れる時期と場所の選び方が難しいです。先日も東京から来た友人が2年続けてトライしましたが、2年ともボウズでした。岸近くにヒメマスがいらないと言っていました。キャッチ・アンド・リリースです。モーターボートでの釣りは禁止です。釣りのライセンスは不要です。

5. 知床半島のサケ釣り

9月初めから半ばの頃でした。ウトロから出港した乗合船は、知床半島の突端近くまで行き、70mの深さまで電動リールを下ろしました。すぐに来ました。入れ食いです。2匹同時に釣れたこともありましたが、隣りの人の糸とお祭りしないように、電動リールで素早く上げます。型のいい見事なシロザケでした。知床の山並みを見ながらの釣りは最高でした。でも贅沢を言いますと、電動リールを使うので、大物を自力で釣り上げるという醍醐味が少なく、少々物足りませんでした。

この時期は全国から釣り人が集まりますので、9月1日～15日前後のハイシーズンにはなかなか船の予約が取れません。釣り人の中には、翌年の予約をして帰る人も多いと聞きました。ただしこれは10年ぐらい前の話です。最近はサケが来る時期が年により微妙に異なり、釣れないことも多いと聞いてます。でも最近のことはよく分かりません。

6. イトウと佐々木榮松画伯

隣の阿寒町に「釧路湿原美術館」(写真)があります。画家・佐々木榮松(ササキ エイショウ)氏(写真)の美術館です。佐々木画伯は独自の画風で釧路湿原を描き続けましたが、2012年に98歳で亡くなりました。佐々木画伯の作品を集めた釧路湿原美術館は、高野範子氏らの献身的な努力により、2013年、釧路市阿寒町にオープンしました。

佐々木画伯はイトウ釣りの名人で、釣り好きの作家・開高 健氏も何度か画伯の教えを請いに来てます。昭和30年代のことです。この美術館には二人が釧路川で釣ったイトウの写真が展示してあります。イトウにしては小さいのですが、二人が一緒に行って共に釣ったということは、今では信じられないことです。イトウはそれだけ稀な魚になってしまいました。昭和 30年代ごろは釧路湿原の至る所でイトウが釣れたそうですが、イトウ釣りが全国的に知られるにつれて、イトウは乱獲され、釣れる場所は急に少なくなってしまいました。

佐々木画伯のエッセイ集「釣りとわたし」に、開高 健氏のことか書いてます。佐々木画伯が開高氏と巨大なイトウを釣った話では、釣った場所は書いてません。釧路湿原と書いてあるだけです。佐々木画伯が開高氏を案内したのは、おそらくキラコタン岬のような入るのに許可が必要な場所だったのではないのでしょうか。このような場所なら、確実にイトウが釣れるのではないかと思います。ここならおそらく1mを超えるイトウが釣れたのでは。キラコタン岬付近には、今でも巨大なイトウが潜んでいるはずですよ。

佐々木榮松氏は、絵と文の両方で生涯にわたって釧路湿原を描き続け、イトウやアメマス、ニジマス、ヤマベなど釧路湿原の魚を知り尽くし、釧路湿原の生態を詩人のように描きました。

画伯によりますと、イトウは世界で5カ所に棲息しているそうですが、そのなかでもっとも多い区域がアムール系と樺太から道東にかけてだそうです。画伯はイトウを次のように述べてます。金環に巻かれた黒い瞳孔を輝かせ、黄金の肌には無数の黒い斑(まだら)を帯びて、獲物を待ち構えている。それは、さながら猛獣の豹を彷彿とさせるし、幻想の念さえかきたてる。

淡水魚で日本一大きいのがイトウです。どれほど大きいのでしょうか。またまた佐々木画伯のエッセイによりますと、昭和10年ころ塘路に体長10尺(3メートル)ぐらい、あるいは15尺

(4.5メートル)ぐらいのがいたらしいとのことでしたが、どの釣り師も竿を折られたり糸を切られたりするばかりで、姿は見てないとのことでした。ちなみに佐々木画伯が釣ったもっとも大きなイトウは4尺(1.2メートル)でした。旧釧路川と新釧路川に分岐点よりやや下流の新釧路川の深みで釣ったとのこと。画伯は、記念にこのイトウで魚拓を作ってます(写真)。

さて私自身のイトウ釣りはといいますと、道北の猿払川とその近くで2回試みたうちの1回でイトウがかかりました。50~60cmだったと思います。なぜ大きさがはっきりしないかといいますと、1メートル半近い高さの岸の上に引き上げようとして糸を引っ張ったところバレてしまったからです。タモを使えば良かったのですが。

厚岸湖に注ぐ別寒辺牛(ベカンベウシ)川でも釣れることがあると聞きましたので、何度かルアーで試しましたが、釣れませんでした。本当の釣り方を知らないためでしょう。近年道北ではイトウが増えてきたと聞いてますので、再度チャレンジしてみたいものです。

ヒメマス(姫鱒)

ベニザケの湖沼残留型。アイヌ語でチップ。
夏は深場にいるが、秋になると湖岸や流入
河川の砂礫に産卵する。



屈斜路湖

釧路湿原美術館



佐々木榮松画伯が釣って、自分で作った
4尺（1.2メートル）の魚拓

イトウ



● 道東の冬は世界一美しい

1. 鶴居村のタンチョウ、
2. 阿寒湖や網走湖でのアイス・フィッシング、
3. 摩周湖の霧氷、
4. オホーツク海の流水。

この4か所をお薦めします。オホーツク海の流水が最高ですので、2月の後半においでください。

1. 鶴居村のタンチョウ

タンチョウ(丹頂)は、今年の調査では、鶴居村を中心に 1,924 羽が確認されました。飛んでる姿がとくに優雅です(写真)。頭頂にはほぼ羽毛がなく黒い剛毛がまばらに生え、血管の透けた赤い皮膚が裸出しています(写真)。タン(丹)は「赤い」の意で、頭頂に裸出した赤い皮膚のことです。食性は雑食で、昆虫やその幼虫、エビ類やカニ類、セリやハコベの葉など多様です。冬になると餌が摂れなくなるので、冬場は場所を決めて給餌してます。鶴居村では鶴見台(写真)と伊藤サンクチュアリ、隣の阿寒町では阿寒国際ツルセンターです。ただしあまり個体が1か所に集まると鳥インフルエンザに感染する恐れがありますので、最近は餌の量を減らして、過度に集まらないようにしています。そのためタンチョウは広く散らばるようになってきました。渡り鳥ではなく留鳥です。夏は釧路湿原などに棲息してます。我が家の周りでも見かけます。





給餌場の鶴見台

タンチョウの名前の由来
頭頂に血管の透けた赤い皮膚が
裸出している。



2. 阿寒湖や網走湖でのアイス・フィッシング

始めに米国のアイス・フィッシングについて述べます。米国のメイン州でアイス・フィッシングをしたことが2回あります。大きな川の河口近くで、干潮時から満潮時にかけて、石油ストーブか薪ストーブがある小屋で、smelt スメルトというワカサギよりもやや大きな魚を釣りました(写真)。潮が満ちてくると smelt も潮とともに上がって来るので、この時間に釣るのだそうです。潮の満ち干で氷は50cmほど上下しました。

少し長くなりますが、当時の記録を引用します。アイス・フィッシングでは、氷の厚さは少なくとも6インチ必要、氷には黒い氷と白い氷があり白い氷は雪が凍ったものなので透き通った黒い氷の方が強くて安全、6~7フィートの深さのところで釣れることが多いのであまり岸から離れた所では釣らない方がいいしその方が安全、先ず岸に近いところから氷に穴を開け氷の厚さと性質を調べる、近くの釣り人に氷の厚さや性質を聞くこと、一人では行かないこと、家族や友人に行く先を告げてから行くこと、などでした。

小屋に入ってどこで釣るのかと見回しましたら、部屋の両側に床の板張りがなく、40cmほどの幅で細長く水が見え、この部分には氷がありませんでした(写真)。ここで釣るのです。壁には釘に糸が巻きついていて、錘と小さな針が付いてました。この糸を垂らして釣ります。釣竿はいりません。ゴカイは細かく切って付けるようにとのことでした。水底から少し糸を上げ、針先が水底から少し離れるぐらいにして、そのまま放置するとのこと。糸を動かす必要はないと言われました。

1回目の釣行ではほとんど釣れませんでした、2回目は30匹ぐらい釣れました。帰宅後に塩焼きとから揚げにして食べましたら、その美味しいこと、大感激でした。思わず成仏した smelt 様を拜んでしまいました。

帰り際、後片付けの仕事をしていた若者に聞きましたら、一番釣れるのは夜だそうです。電球の灯りに寄ってくるようです。すると、おじさんおばさんが12~3人、グループでやって来ました。どうも釣りをするだけではなさそうで、土曜の夜を飲んで食べて楽しもうという様子です。一方若者は、耳をつんざくほどのうるさい音を出してスノーモビルを乗り回しています。彼らは思い思いの方法で、長く厳しい北国の冬を楽しんでいるようです。

メイン州の釣り場は大きな川の河口近くですので、周囲はただっ広いだけでした。釣り小屋から見える景色は、単調そのものでした。これが阿寒湖ですと、東には雄阿寒岳が見え、西には雌阿寒岳が見えて、素晴らしい景色です。すっかり阿寒湖のアイス・フィッシングが好きになってしまいました。ただ阿寒湖で問題なのは、釣り場として決められている場所が岸から遠く、水底までが深いことです。水底まではおそらく10mぐらいあるでしょう。ワカサギは湖底にいます。すると針の上げ下げに時間がかかるので、能率が悪いのです。一方、網走湖は湖底までは2~3mと浅く、すぐに巻きあげることが出来ます。なぜか女満別町に近い網走湖の釣り場がよく釣れるのです。雄大な阿寒湖の写真と網走湖の釣果の写真をご覧ください。



メイン州南部の河口にある
アイス・フィッシング用の小屋

小屋の中で釣る





smelt

smelt 大漁

ここには隣の小屋で釣っていたおじさんから
もらった smelt も入ってます。



阿寒湖と雄阿寒岳

ワカサギ釣りのテントが少ない静かな阿寒湖と
湖の中の分厚い氷の上に車が停まってる
にぎやかな阿寒湖



雄阿寒岳

阿寒湖



ワカサギ 網走湖で大漁



3. 摩周湖の霧氷

北海道の東部、川上郡弟子屈(てしかが)町にある摩周湖は、弟子屈町の中心から北東へ約11km、川湯温泉から南東へ約12kmの距離にあります。摩周湖へは冬でも行けます。ただし川湯温泉側からの道は閉鎖されています。

東北海道では、積雪が多くない分、凍えるような冷気が漂うため、昼間でも気温がプラスにならない日が続きます。またこのエリアは屈斜路カルデラという外輪山に囲まれているため、条件がそろえばカルデラの底には冷気が溜まり、マイナス20度以下の気温になることも珍しくありません。そんな極寒の地の木々が冷気によって冷やされるため、木々に水分が触れると凍り白い衣をまとい霧氷になっていきます。霧氷が見られる1月下旬から2月下旬頃にかけての摩周湖はとりわけ美しく、絶景が広がっています。午前10時を過ぎると、はらはら舞い落ちてしまうこともあります。晴れの日が続くと霧氷になる確率は低くなるそうですが、摩周外輪山から昇る日の出が見られるのも見どころの一つです。展望台の周囲が霧氷となり朝陽が当たると、まるで桜のようにピンク色に輝く霧氷に出会うこともあるそうです。

霧氷を見たい場合は、ガイド付きの「摩周湖霧氷ツアー」がおすすめです。例年12月下旬から翌年2月下旬頃まで実施されています。周囲の自然や霧氷についての解説を聞きながら、厳寒期の摩周湖の景色を楽しみましょう。ツアーのときの気温はマイナス10度を下回る厳しい寒さですので、頭から足先までしっかり防寒対策をしてください。使い捨てカイロもお忘れなく。「霧の摩周湖」の異名がありますが、冬の摩周湖は比較的天候が安定しており、晴天の日も多いです。この写真のような霧氷を見ることができれば、一生の思い出になるでしょう。



4. オホーツク海の流氷

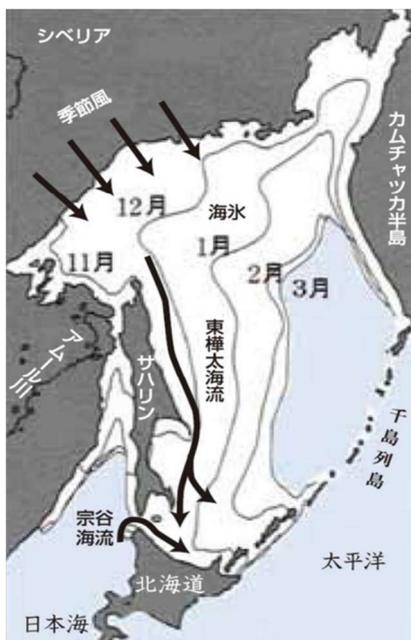
これが道東の冬が一番のお薦めです。これまで紋別で流氷を見たことはありませんので、オホーツク海といいましても網走付近から知床半島にかけての流氷の紹介です。能取岬(のろみさき)からフレイト展望台にかけて、2月半ばから末までがお薦めです。この地図をご覧ください。ただし地球温暖化で、これからは流氷が接近する期間が短くなるかもしれません。北海道のオホーツク海沿岸の緯度は、イタリアのベニスの緯度と同じです。この緯度で流氷が見られるのは、世界中で北海道だけだそうです。

流氷のふるさとは、シベリア沿岸とサハリン東岸沿岸です(次の地図)。そこで作られた流氷が海流と季節風のため南へと流され、北海道に接岸し、沿岸に沿って南下します。能取岬から見る流氷は、この写真のように、氷の白さと海の青さが混在して、素晴らしいコントラストになります。ときにはぎっしり氷が詰まった真っ白な流氷が押し寄せることもあります。これも美しいです。流氷の上に、オオワシがいることもあります(写真)。フレイト展望台(写真)からは遠くに知床連山が見えますし、その右には海別岳(うなべつだけ)、さらに右には斜里岳が見えます。

強い南風が吹きますと流氷は北へ押し返され、知床半島北岸の流氷以外は、あっという間に去ってしまいます。訪ねてみたら流氷はなかったということがないように、海水情報センターからの海水速報

https://www1.kaiho.mlit.go.jp/KAN1/drift_ice/ice_chart/latest_icechart.jp.html

をご覧ください。この海水速報は、流氷の位置と厚さを、毎日、人口衛星が知らせてくれます。



砕氷船おーろら、網走港からオホーツク海へ



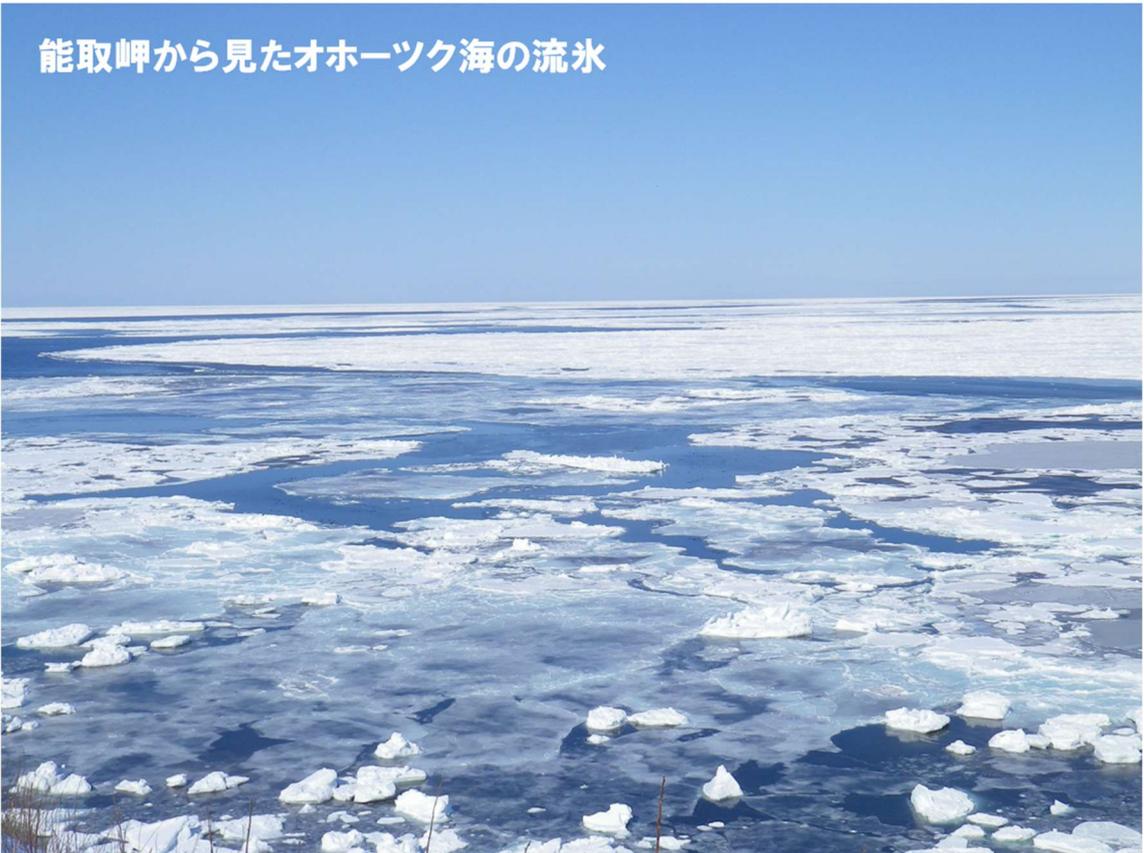
能取岬灯台とオホーツク海の流氷



流氷の上にオオワシが



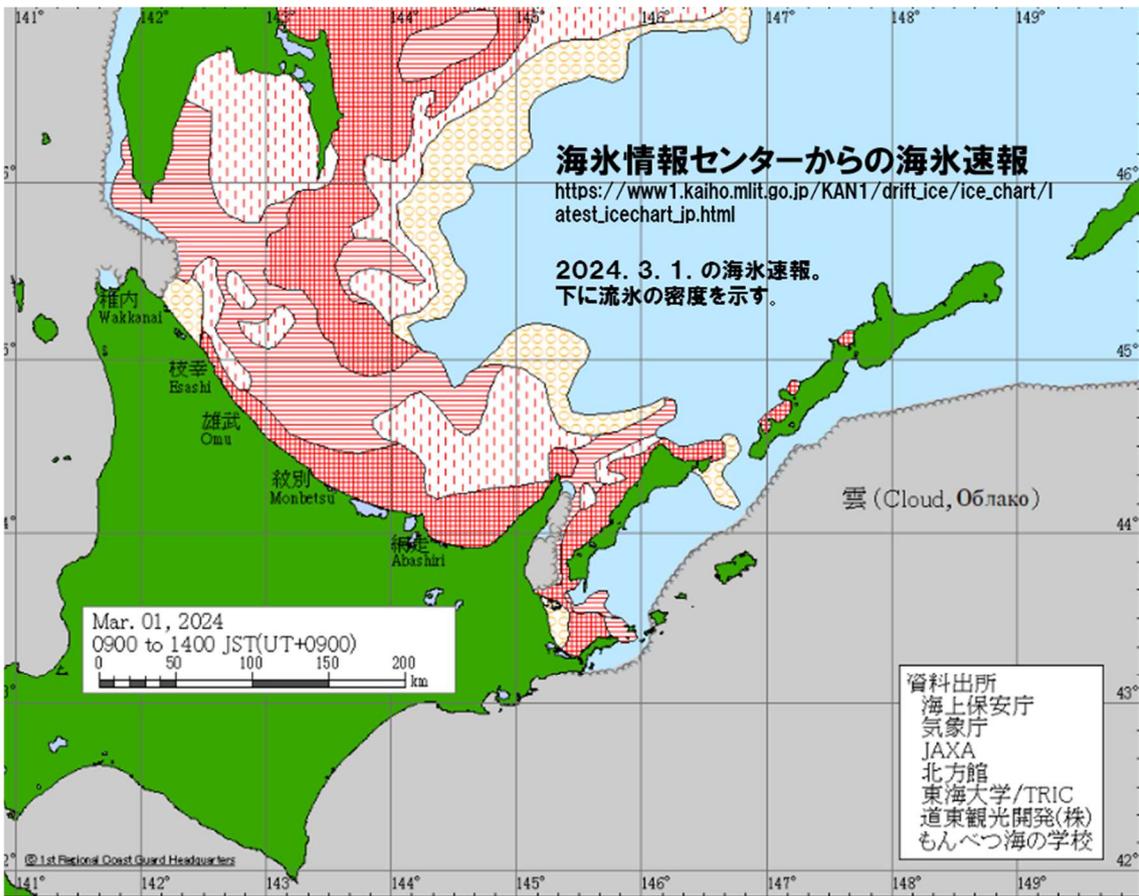
能取岬から見たオホーツク海の流氷



フレイトイ展望台から見た オホーツク海



知床半島の山々



凡例 / Legend / Обозначение сплошности льда в баллах

